おはようございます。今日から「他者に向き合う」シリーズです。

「他者」というのは西洋の用語法からすると、必ずしも「他人」を意味しません。自分以外の存在、世界や神といったものも他者です。そういう広い意味で「他者」というものを考えていただければと思います。

さて「他者に向き合う」ですが、これも原理的に考えれば向き合うことは出来ません。何故なら自己とか他者といったものが実体としてあるわけではないからです。自己はいわば空っぽで、すべての他者にかかっている。そういう仕方ですべての他者が自己を成り立たせているとも考えられますし、すべての他者が自己の中にあると考えれば、すべてが自己だとも考えられるわけです。生物の世界（人間も生物である限りこの世界に属していますが）はおそらくこのような仕方成り立っているでしょうし、我々人間も何かに集中し、あるいは没頭しているときにはこういうあり方をしていると思います。

ところが人間だけが自我（自己）に目覚めます。しかも自分で目覚めることは出来ません。他者としか言いようのない何かによって「呼び覚まされ」、それに「応える」ことによって自我（自己）に目覚めるのです。この時に初めて「他者に向き合う」ということが起こります。

さしあたり「他者」は「世界」や「対象」という姿で立ち現れますが、その中に「人間」、つまり「他人」がいなければ人間は自分を人間として認識することは出来ません。自己は他者のうちに自分と同じものを認め、自分のうちに他者と同じものを認めることを通じて初めて人間でありうるのだと思います。

今日はここまでです。続きは次回。本日もよろしく願いいたします。